

黒

部

1 はじめに

小野 龍 彌

技術研究会では昭和38年、39年の2年間に亘り、その夏山計画の一環として黒部川をとり上げてきた。その主目標は上ノ廊下の溯行においたのであるが、アプローチ及び退却において平より上流で4本の支流にも踏跡を残す結果となった。38年の黒部については「踏査」技研特集号に、39年については合宿報告書によって報告をなした。

吾々が黒部に感ずる郷愁のごときものは、まだまだその門戸に立ったのみであり、大黒部の支流や廊下には尽きせぬ魅力をもって奥深いものがある。こゝに吾々の歩ゆんだ黒部を総合的にふりかえってみて今後の黒部の一資料としたい。

2 日程及びメンバー

昭和38年度

8月 8日 富山 — 仙人ダム — 十字峽

9日 十字峽 — 平

13日 平 — 七倉尾根 — 大町

メンバー 鈴木 中野 永森 小野

9月 1日 大町 — 針ノ木峠 — 平

2日 平 — 口元のタル沢手前

3日 タル沢手前 — 数合沢出合

4日 数合沢 — 核心部引き返レ点 — 数合沢溯行 —
数合のテント場

5日 テント場 — 薬師岳 — 薬師沢出合

6日 出合 — 三俣蓮華 — 湯俣

7日 湯俣 — 大町

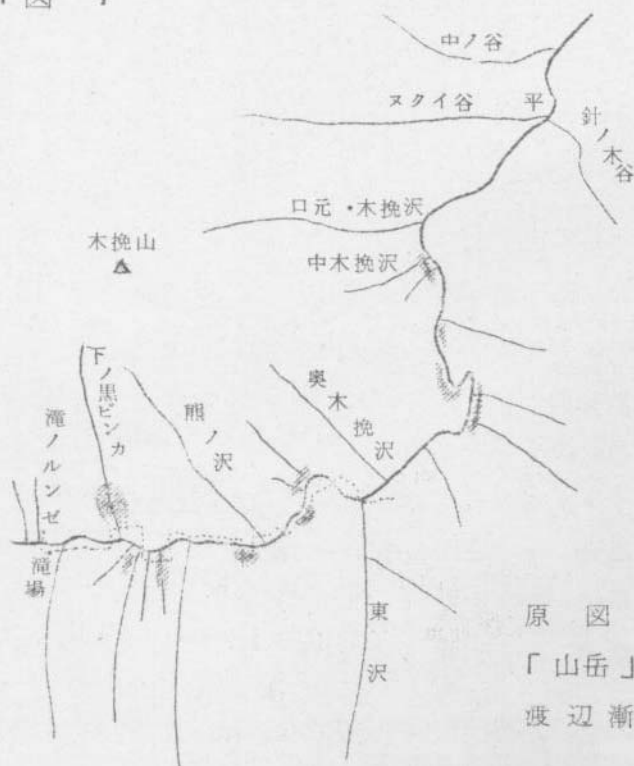
メンバー 増瀬 永森 小野

昭和 39 年度

8 月 2 日	大町 — 平
3 日	平 — 五色ヶ原 — 廊下乗越
4 日	乗越 — 廊下沢 — 数合沢出合
5 日	数合沢出合 — 金作沢出合
6 日	金作谷 — 赤牛沢出合 — 奥ノタル沢出合
7 日	出合 — 薬師沢出合 — 雲の平
8 日	雲の平 — 岩苔乗越 — 三俣蓮華 — 湯俣
9 日	湯俣 — 葛
10 日	葛 — 大町
メンバー	三浦 古谷 和田 小野

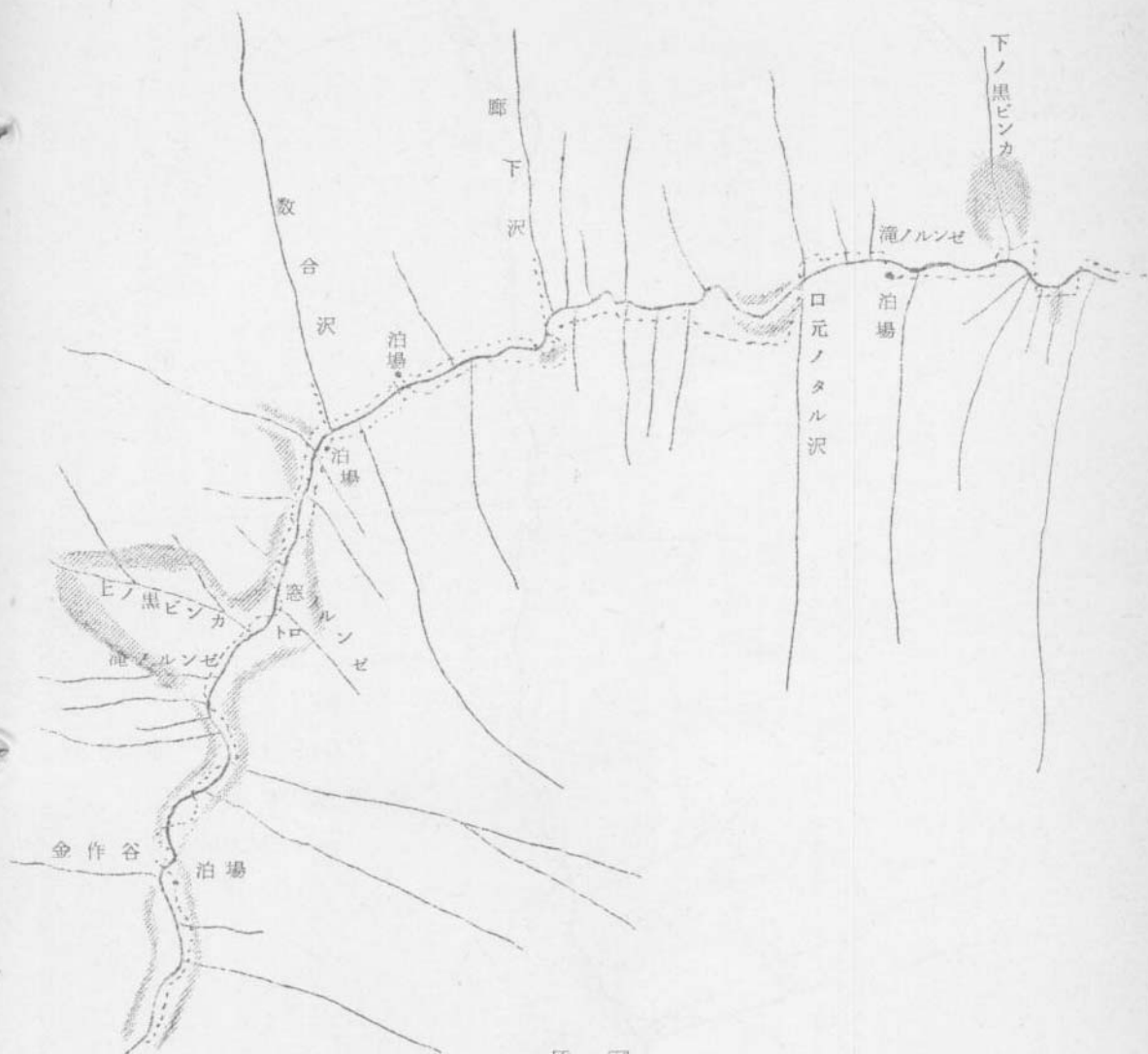
3 ルート図

ルート図 1



原図

「山岳」24号・昭和2年
渡辺漸氏作図

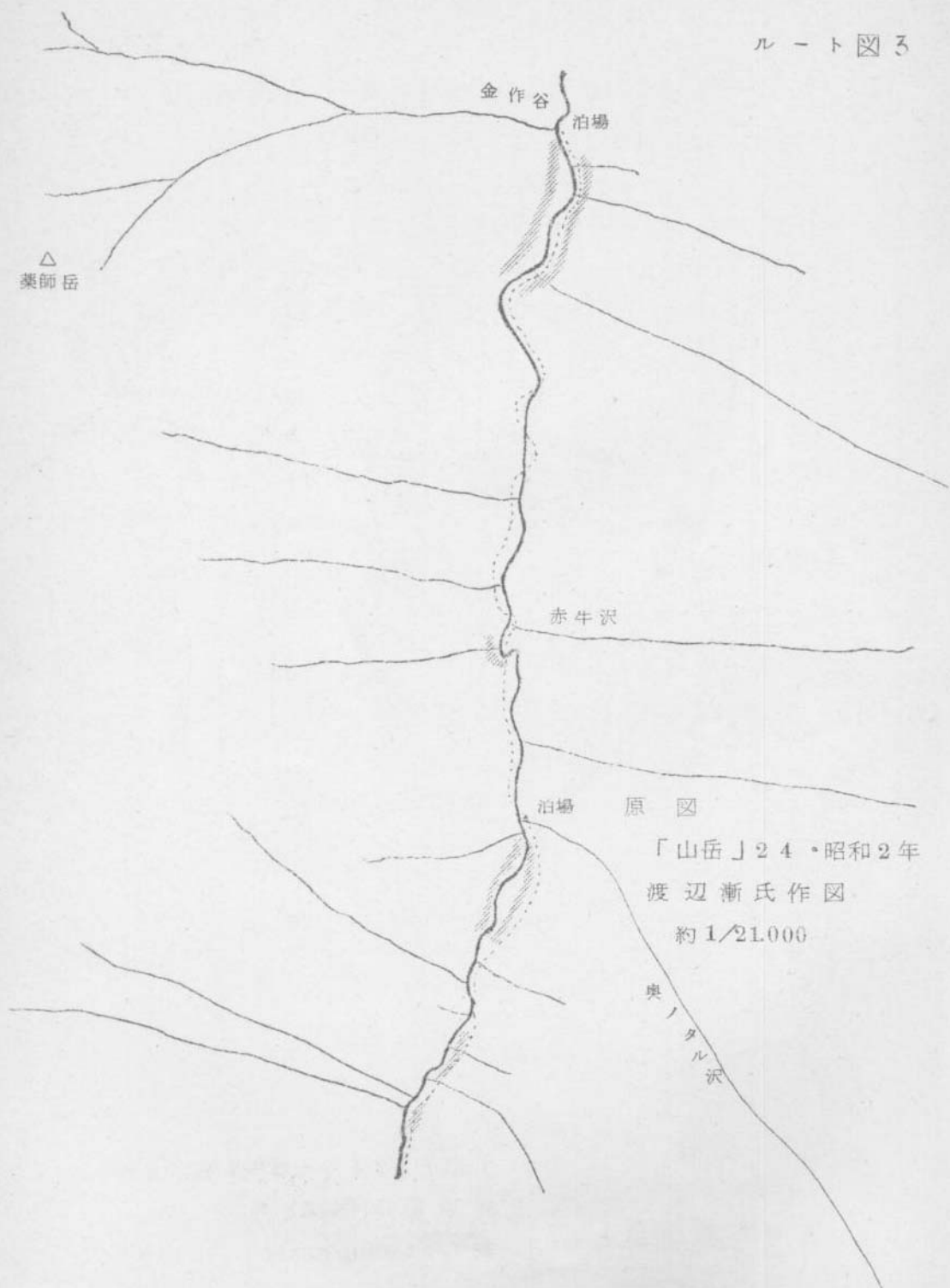


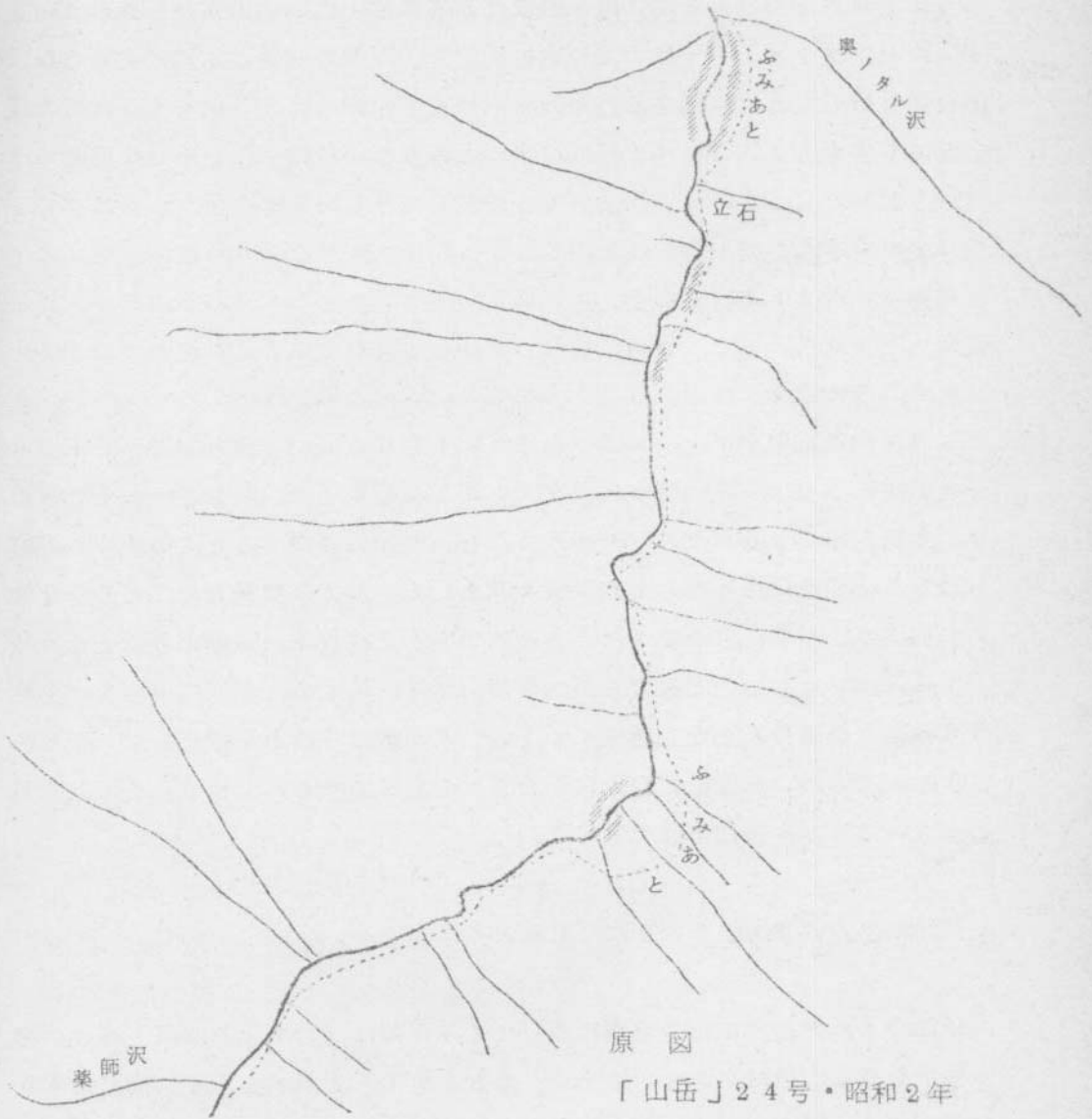
原 図

「山岳」24号・昭和2年

渡辺漸氏作図

約 1/21,000





原 図

「山岳」24号・昭和2年

渡辺漸氏作図

約 1/21000

4 ルー ト 解 説

「上ノ廊下」

平より口元のタル沢まで（昭和38年）

平より東沢までは部分的には未完成だが右岸沿いにいい道がひらかれている。ダムのパックウォーターは口元の木挽沢附近、東沢の水量は本流に劣らない。出合附近は広大な河原である。東沢を右岸より左岸へ渡渉（太もも）次に本流を渡る（太もも）、行きづまれば対岸へと渡りながら熊ノ沢の小さな出合をすぎ、しばらくして右岸に45度余りの岩盤を流れる滑滝に出合う。更に進むと黒ピンカの屏風がつかなるのを仰ぎながら左岸水面より20m程ブッシュの中を高捲く。かすかな踏跡あり、更に岩をのりこえたりして進むと流れが右へと直角へと折れ次いで左へ直角に折れ、両岸とも岩壁にかこまれ流れがせまくなったところにくる。廊下のはじまりである。右岸の壁には残置ハーケンがある。こゝで左岸の草壁をブッシュにつかまって100mばかり登り上流へとトラバース気味に下り岩の露出部は木立をビンにして懸垂下降、降り立ったところのすぐ上流左岸より溜れたルンゼが入りこむ。左岸行きづまるところ右岸へ（腰）しばらく小さな高捲きをして岩の段々状を行く。流木の集積したところをすぎ右岸樹木の小さな高台となったところはテントをはれる。左岸より滝となっておちるルゼンを見るところで左岸へ渡渉（腰）、口元のタル沢の出合まで高さ50m余りの高捲きをなし懸垂にて下る。タル沢出合の上流側を右岸へ渡渉（首）こゝより奥の本流は完全な廊下となって右に曲りこんでゆく。こゝは水量の少ないときのみ通過可能であろう。

口元のタル沢より数合沢まで（昭和38年）

口元のタル沢左岸本流の右岸にのびてくる下部は露岩で上方は草と灌木の細い屋根を登る。踏跡がかすかにある。なおも登ると上流へと水平方向に巾45cmぐらいの小径がのびている。東信歩道跡であろう。この小径はブッシュの多いところでは消えてしまうが、大体水平方向に高捲いてゆく。下方には溪流が

きこえ、時には流れが見える。ルンゼを4本越すと径は小尾根をのりこえてルンゼに向けて下ってゆく。ブツシュにつかまって懸垂の要領、降りたルンゼは赤茶けたガレ岩が本流へと入っている。川巾もひろくなり廊下沢の出合まで小さな高捲きをしながら右岸どおしにゆく。本流の左へ曲ったところに廊下沢が入ってくる。更に右岸を段々状の岩をへつつたりしてゆく。数合沢まで兩岸共にひらけている。左岸へ渡渉(胸)したところは砂地の快適なキャンプサイトですぐ前方が数合沢出合である。

数合沢より引返点まで (昭和38年)

キャンプサイトの前を右岸に渡る(太もも)、なおも進むと数合沢の出合赤いもろい岩肌である。左岸沿いの本流は赤茶けた壁が流れに没している。右岸のやゝ大きな岩をへつつて越え、更に大岩の上へ追い上げられる。上流へは垂壁となっていて10mばかり下から又前進できるところ、こゝはなおも10mばかり上流へブツシュをトラバースしてモミの木の手首ぐらいをピンにして25mの懸垂下降、更に進むと流れにむかってぬるぬるした丸い壁が15mつづきボルト(太さ2cm)の打たれた跡の穴が2~3あるところ小さなホールドに身を託してトラバース、つゞいて磧を越え白いつるつるの丸い岩をトラバースここにはボルトが残っている。いづれのトラバースも下は深いトロとなって流れている。つゞいて立壁の下水中をトラバースやゝ進むと右岸は通れなくなる。左岸は段々状の岩が流れに面しその上は垂壁となっている。上の黒ピンカである。左岸の段々状へ渡渉し(腰)10m程の高さに上ったところ平たく広い岩を上下して60mばかり進む。前方に立っている岩塔状の尾根の突端を境にして本流は右に折れている。右岸も逆層立壁がつゞき、その先には白いダンゴの様な岩の重なった磧が見える。段々状の岩を下り流れ近くを右に折れこんでいる地点に向って進むと小さな磧がある。

廊下沢より金作沢まで (昭和39年)

廊下沢出合の本流右岸には修復された東信歩道の赤ペンキの矢印が上流をさ

している。出合上流を右岸へ渡り（ひざ）行きづまるところ左岸へ渡る（すね）38年の快適な砂地のキャンプサイトは岩と石の河原になっている。数合沢出合附近を右岸へ渡渉（ひざ）こゝは砂地になっており、テントをはるによい。次に左岸へ渡り（太もも）赤茶けた立壁の下を辿って段々状の岩をこえ、38年の引返点に到達する。

流れの中の浅瀬に渡り次に右上流側の巨岩へ乗り移り、さらに背丈ぐらいのツルツルの丸く白い岩へ手前の小さな岩よりフリクションではいのぼる。左岸沿いに行きづまると手前で右岸の段々状の岩へ渡る（腰）流れはきつい。段々状の岩を登って下りると上方の森林の中に窓を見せたルンゼに出合う。

浮石がつまっているが、増水時の高捲きルートであろうか、更に右岸をゆくと小さな河原になり、その先は垂壁となり、さらに左岸の壁はドーム型に100～150m立ちはだかっているところにある。流れは巾10mぐらいでまったくのトロとなっている。その先では流れが1～2mの落差を見せて左岸よりに白い岩が見える。先づ流れの中程のやゝ浅いところへ向ってゆき、そこより上流を目指す。一步一步深くなる。進めない程の力が加わる。押し戻され気味に左岸側へ移ると、こゝは又浅くなっている。この間約50mで白い岩に達する白い岩は、はい上れずショルダーが必要であろう。こゝは左岸のツルツルの壁に残置ハーケンもありこの壁を突破する。

こゝより流れは右へ折れ更に左に曲っている。ピンカより水の濁れたルンゼが入っている。なおも左岸沿いにゆくといずれの段々も流れに向って外傾したところへでる。わらじのフリクションをきかせて歩いたり、上のひさしをかざってこえたり最後は水中にずぶりと入って越える。なおも左岸沿いに行けるが上の黒ピンカもやゝ明るくなる。滝が本流に直接落ちているところは壁と滝の落水との間に人間が一人もぐりこめるだけの隙間があるのでこゝを通る。それより楽に壁の下に狭い石の河原をたどると左岸に巾の広い岩壁を落ちる滝と出合う。三本の流れとなって落ちている。このルンゼの上方で流れは左に曲りこんでゆく。この曲るところで右岸やゝ上手に向けて渡渉、更に右岸壁沿いの水中を辿り最後は胸まで水に浸って水面上1m程の垂直の岩をはい登ることになる。浅い割れ目がポイント、更に岩の上をゆくと右岸より滝のルンゼが入り流れは右へと折れる。右岸の荒々しい河原の先は壁が流れに沈んで行けそうにな

い。こゝより上流は再び森林の尾根が左肩を、ぐうーんと落としているのを見る。右岸行きづまるところ左岸へ渡る。上手には滝が落ちている。この下を通ってゆくと金作沢の段丘がすぐ前に現われ川巾はいよいよ広くなる。早瀬を右岸へ渡り次にやや飛石で、左岸へさらにゆるい流れを右岸へ渡る（腰）と金作沢出合のすぐ前に出る。充分にテントをはれる。

金作沢より薬師沢まで（昭和39年）

出合より右岸通しにへつつてゆく。岩は硬い。流れは深いトロの連続となっている。左手より小さなルンゼを迎えて左岸にも岩壁から小滝がでている。右岸の壁は水中に没して行けないように見えるが狭いバンドをはって進む。

次に右岸よりチムニー状のところを滝が出ている。階段状の岩を下りる。流れは右に曲り、なおも右岸のツルツルの岩に手のフリクションや水中のホールドを求めてゆく。右岸に大きな右へと曲ったルンゼを迎えてより流れは2m程の落差を見せて谷巾も5m程にせばまり、すさまじい流れとなっているところに来る。こゝは奇妙な姿勢をくり返して岩をはい、水中に入ってこなす。谷は左へ曲り、辺に広々としたところへ出る。廊下をぬけ出たのである。なお行くと右岸よりルンゼが入り流れは右へ曲る。左岸は立壁となっており左へ曲ってゆくところで左岸へ渡渉する。左岸は石の河原となりつゞいて右岸が立壁となる。こゝで右岸へ渡って立壁をこえる。薬師岳より沢が入ってくる。なおも右岸をゆくと又薬師岳よりの沢が入る。右岸は広い段丘地で右岸にも水量の多いルンゼが入る。本流はトロとなり白い岩肌のところより左に折れる。

左岸へ渡渉し白いツルツルの岩をトラバースする。本流は左へ左へと曲って浅瀬とトロの連続である。左岸より薬師岳より三本目の沢が入る。兩岸とも垂壁となってその間を油の様なトロが流れる。こゝはトラバースして越える。ここから本流は右へ曲る。さらに左岸を行くと大きな沢が入る赤牛沢である。出合手前で右岸へ渡る。森林は川身までおりている。右岸は荒れているので左岸へ渡る、奥のタル沢の広々としたところが見えてくる。右岸へ奥のタル沢の前で渡ると、岩小屋はすぐ近くである。上流へは細々とした路跡が確認される。

出合より本流は兩岸壁つゞきとなって廊下状であるが右岸沿いの高捲きルートに入る。次第に本流が開けるとこゝでこの路跡は川身に出ている。右岸通し

にせまい石の河原をゆく、左岸よりかなり大きいルンゼをむかえて、すぐ右岸に30mばかりの立塔を見る。これが立石である。更に右岸をゆくと対岸より広々とした沢がモレーンをともなつて入ってくる。本流は左にゆるやかにカーブして眼前に雲の平の台地が見えてくる。こゝで流れは右へと折れる。川身は開けて左岸へつゞいて右岸へと渡る(足首)、なおもゆくと右岸は壁が水に没している。高捲きルートがある。二本の細い滝のルンゼを迎えるところで本流は右へと折れ込む。そこからは又兩岸共廊下状となりトロと早瀬がつゞいている。ケルンに導かれて高捲きの踏跡へと入る。この往はルンゼへと下りる。このルンゼは本流へ滝となつて入っている。こゝから又ケルンに導かれるが踏跡を見失つてブツシュをこいでゆくと、さらに次のルンゼに出る。このルンゼはせまいトユ状となっている。これを下りると下りたところは兩岸壁つづきだが右岸ぞいに行く。見失つた高捲きルートは三本目のルンゼを下りていた。こゝが上ノ廊下の出口であり、入口である。こゝより踏跡もすでに道と呼べるものになりピッチが上る。左岸より大きな沢が入ってくる。更に進むと吊橋が見えてくる。薬師沢出合である。

薬師沢より源流まで(昭和38年)

出合より左岸をゆく。赤城沢出合附近はトロとなり、その上は本流全体が、4~5mの落差を見せている。大体左岸沿いに川身に出たり高捲きをしたり踏跡を辿つて進む。五郎沢出合の三角洲より右岸へ移る。本流は小さく規模を変え、巨岩巨石の河原つゞきとなる。祖母沢祖父沢をすぎまもなく二股に着く。左すれば岩苔乗越右すれば鷲羽乗越へ出るのである。いずれも道が通じている。

「下ノ廊下」

仙人ダムより平まで(昭和38年)

仙人ダムより右岸沿いの広い道を行けば東谷出合である。出合本流を吊橋で左岸へ渡りジグザク道を登つてのち水平道路に出る。水平道路は特大ザック以

外なら岩をえぐったその道につかえもしない。所々崩壊もあるが、S字峡・半月峡を足下に十字峡に達する。剱沢右岸高台にいゝキャンプサイトがある。

水が少し落ちている下のタル沢の割れ谷を対岸に左岸には別山の障壁をのぞみながらゆくルートは圧巻である。兩岸はきり立ち白竜峡のはじまりである。この険悪な廊下もようやく川巾をましたところ黒部別山沢の出合に着く。こゝで本流は左へまわり込み赤沢西尾根の猫の耳が奇異なピナクルスをもたげている。更に進むと大タテカビンより割れ谷が入る。右岸は新越の赤壁でつづき斧でたれわたった様な新越沢が滝をなして落ち込んでいる。左岸は樹木の繁る台地状である。さらに平凡になった流れを足下に鳴沢小沢に出合う。こゝをすぎ繁みを抜けると榛ノ木平にくる。小屋跡をとどめる快適なキャンプサイトである更に繁みに入ってゆくとルンゼが入る。見上げる眼には別山の大タテカビンが立ちはだかっている。対岸には鳴沢小沢とならんで鳴沢が入る。つゞいて内蔵之助沢と出合う。この沢の右岸に工事用の小屋がある。左に本流は曲り、赤沢岳の西尾根の末端には工事用の道路が走っているのが現われる。すぐにダムが見えてくる。左岸より右岸に鉄の橋があるが登山道は左岸つゞきである。ダムから上流もいゝ道が開かれている。御山沢は満水時のためにずっと奥の方に道が入っているのでこのあたりは地図で想像のつかない時間がかかる。スバリ岳西稜、スバリ沢と見てようやく平に到達する。

5 コースタイム

「下ノ廊下」

- 仙人ダム — 0.15 — 東谷沢 — 1.55 — 十字峡
○ 十字峡 — 0.40 — 下のタル沢 — 0.45 — 別山沢 —
0.35 — 新越沢 — 0.15 — 鳴沢小沢 — 0.25 — 鳴沢
— 0.15 — 内蔵之助沢 — 0.30 — 赤沢 — — 黒四ダ
ム上部 — 0.50 — 御山谷 — 1.55 — 中の谷 — 0.50
— 平 (38年)

「上ノ廊下」

- 平 — 0.25 — 口元の木挽沢 — 1.35 — 東沢 — 0.35
— 熊の沢 — 0.45 — 滑め滝 — 0.45 — 黒ビンカ —
3.05 — 口元のタル沢手前滝のルンゼ対岸
- 滝のルンゼ対岸幕営地 — 1.05 — 口元のタル沢 — 1.50
— 廊下沢 — 0.40 — 数合沢手前
- 数合沢手前 — 0.10 — 数合沢 — 1.30 — 引返点
(38年)

- 廊下沢 — 0.20 — 数合沢 — 0.10 — 幕営地 — 3.35
— 金作沢
- 金作沢 — 0.40 — 廊下をぬける — 2.55 — 赤牛沢 —
0.30 — 奥のタル沢
- 奥のタル沢 — 0.30 — 立石の立塔 — 2.30 — ルンゼ下降
点 — 0.45 — 薬師沢 (39年)

「源流部」

- 薬師沢 — 1.05 — 赤城沢 — 1.15 — 黒部五郎沢 —
2.30 — 二股をへて鷺羽乗越 (38年)
- 岩苔乗越 — 0.30 — 二股 — 0.50 — 鷺羽乗越
(39年)

6 支流解説

「数合沢」

数合沢の出合は赤い岩肌が印象的である。水量は廊下沢より多いだろう。沢の奥には数合乗越と数合小屋との間にピークが見えている。入口よりまもなく20 mくらいの赤くもろい滝が落ちている。これは大きく崩壊した右岸を高くブツシュをこいで高まいて下り立つ。小滝をすぎて更に何段にも重なり合った滝にぶつかる。左岸よりは滑滝が落ちどちらの岩ももろく、且の濡れてすべり易い、右岸の明瞭な草壁を登って高くブツシュに入る。樺としやくなげと強尽な細い竹がびっしりと急斜面を埋つめ大変なアルバイトである。とにかく上流へのトラバースに全力をかけねばならない。ブツシュ帯の下は岩である。やがて適当なところで沢身に下りてなおもゆくと二股になっている。右手の沢に入る。平凡な沢を進むと水も消えかけてくる。(小滝の所で大熊と出合った)。細い溝状となる頃乗越へと登りつく。(38年溯行、出合より数合乗越まで約3時間)

「廊下沢」

廊下沢の源頭は廊下乗越である。乗越へ入るには越中沢乗越をすぎて越中沢岳へ向うところより左へと捲いてゆき花崗岩の巨岩の積み重なる中を下ればよい。

乗越の越中沢側は小雪溪とお花畑とハイマツのあるザラ場で小型テントを一張り設営できるだけの空地以外ない。雪溪がなくなれば廊下沢を下って潜流の水の現われる所でテントをはらねばならない。廊下沢側はハイマツで埋まっている。ハイマツの海を下りると樺やブツシュにかくれた雪溪が現れてくる。この雪溪に入ってブツシュをさけながら下ると約45分で広い石の河原に出る。これより沢は勾配をましてくる。潜流となっていた水が一度にあふれ出してくる所で流れの飛石となる。広くゆるい沢をどんどん下ると右手から赤くもろい壁をもった滝のルンゼが出合う。数合の頭付近より発したものであろう。赤牛岳の濃密な森林が眼前にひろがっている。2 m程の滝と小さな淵をこえるころ、黒部の本流に接した赤牛の壁が迫ってきてついに本流に出る。悪場のな

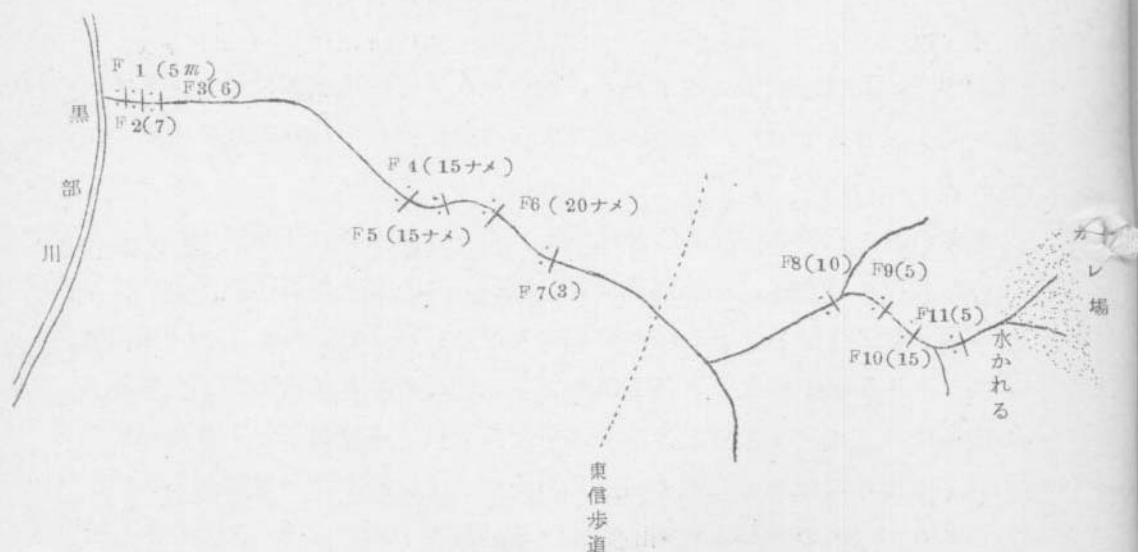
い沢である。(39年、乗越より黒部出合まで2時間40分)

「赤牛沢」

奥のタル沢の岩小屋より約10分で赤牛沢出合に達する。出合は黒い大きな角岩である。すぐに5~6mの滝が三段に続いており、それよりしばらくは平凡になり10m余りの滑滝が落ちているところからこの沢の核心部となる。簡単な流をジャワークライムでこせば東信歩道の修復路が横切っている。(こまで出合より1時間)。

次に小流が三段つづき1~5mの小滝を五段通過すると水がきれて赤牛岳のピークまでガレ場となる。赤牛沢の悪場はこのガレである。(39年8月5日、出合より赤牛岳まで約4時間40分、パーティ、中野 増瀬 鈴木)

赤牛沢図 中野力作図



「 槲 師 沢 」

(38 年、太郎平よりカベケ原まで約 4 時間)

「 奥 の タ ル 沢 」

(39 年、岩越乗越より岩小屋まで約 2 時間 20 分)

7 装 備 — そ の 考 察 —

2 年間に亘る上ノ廊下溯行の装備に対しては、それ以前の数年間の沢登りの体験と先縦者の記録等により十分な検討を重ねたので、両年とも大きな過不足なく装備に関しては自信をもつことができた。

こゝには 2 年間の装備を基本にして黒部溯行における主たる装備類についてひとつづつ考察を加えたいと思う。

A 共 同 装 備

a 生 活 用 具

○ テ ン ト

沢登りにおける標準的なパーティは 2～4 人が適当であろう。最も軽量に携行できるものはツェルトであるが、上ノ廊下溯行にはアブローチを入れて下山まで最小限 5 泊の日数を要するから、居住性を考えた場合できるだけテントをもってゆくべきである。テント防水性は云うまでもなく軽量なものというのが条件である。

次に附属品はポールは必要でない。黒部ではブツシュ、立木あるいは岩にハークンを打って張網をこれに渡せるからである。ペグも 4 本以上は無用なくても済ませる。但し張網は細引と兼用とし(細引の項で述べるが)長いものが必要である。木槌も勿論無用である。グランドシートは布製は濡れたとき重くなるのでビニールシートの丈夫なものが便利であり雨天の場合フライに利用でき

る広さが欲しい。

○ コ ン ロ

黒部の焚木ほど快適なものはないがこれで炊事一切をまかなうことははばかれる。パーティが4人迄ならラジユース、ブリムスの最小型が適当であろう。なお燃料も食糧計画において調理時間の短縮を考慮して少量にすべきである。

○ コ ッ フ エ ル

4人迄なら最小型で充分である。中の茶びんは不必要であり、それだけ余分な空間を作り、且つ重量をます。外なべと内なべとフタだけでザックに入れるときはこの中にも何かをつめることができるのである。

○ 食 器

ボールは各自一枚宛でそれ以上は不要である。その変りにアルミ箔の大皿を2枚づつ持ってゆけば色々と便利である。

b 登 攀 用 具

○ ザ イ ル

水に濡れるのであるから麻ザイルは不適當であり合成繊維のザイルがよい。殆んどザイル使用は渡渉又はトラバースに用いるのであるから11~12ミリのものは不要且つ不適當である。吾々は船具商で購入したナイロン8ミリを使用している。長さは、上ノ廊下においては50mが最適であり、これより短いと渡渉、懸垂時に不足する恐れがある。

○ 三 ツ 道 具

水量の少ない年といえども、その人の技量やルートファインディングによるが若干量はあるべきである。吾々は厚み長さ共中途ぐらいのユニバーサル、兼用シヤモニックを5本携行した。使用したのは38年1本、39年1本である。次にカラビナは5個携行したが3個で充分だったと思う。ハンマーは

トツブとラストがハーケンを抜くために2本は欲しい。

○ す て 縄

懸垂下降の支点、セルフビレイのピンその他便利なものであるから5本ぐらい用意すべきである。

○ 滑 車

無用の品である。体やザックをぬらさないように吊越しをやろうという心掛けなら黒部へ入るなど考え違いであろう。

○ そ の 他 の 共 同 装 備

○ 細 引

これはテントの張縄としても使うことは先に述べたが、本来はザックを水に浮べて対岸やトラバース中にひっぱるのが目的である。ナイロン製の3ミリぐらいのものを20m程用意すれば充分である。

○ ラ ジ オ

トランジスタ数が8石以上でなければ入らないようである、しかも入ってくるのは殆んど短波である。38年に谷間でもよく入るという宣伝文句につられて某社の高周波一段増幅付10石2バンドの小型新鋭機をもって入ったが、その結果は下山するなり叩き売ってしまった。

○ カ メ ラ

必須条件は濡れたり痛んでも惜しいと思われたい、しかも良く写る小型で軽いものということである。パーティーにつき一台以上はさけたいものであるが、ハーフサイズにカラーフィルムをつめて行けば下山後の楽しみが倍加することには認めざるをえない。

○ 釣 具

好きなようになさって下さい。38年は10匹以上一人で食べたが、翌年は1匹も食べなかった。

○ ヘッドランプ

パーティにつき1個以上は不要と思う。

B 個 人 装 備

a 行 動 時

○ 体につけるもの

毛のスポーツシャツ又は毛のボロシャツ、毛のニツカーズボン、水泳用パンツ、毛のストッキング、帽子、薄手靴下

一日中濡れっぱなしであるからには、これ以上身につけても寒さに大した変化はない。なお以上の品物の着換えは必要ではない。何故ならその日の暮営地についたとき、すぐにしほり、陽が当たっているなら干したり、大抵はテントをはったり夕食の仕度の間に生乾わきとなり寝る頃にはそんなに生理的な悪感を覚えない程度になつている。濡れた物は一番上に着て寝ることである。

b 就 寝 時

純毛の下着上下、セーター、オーバーズボン、シュラフカバー、エアーマット。吾々は夏であれば、3000mの稜線上でも寝るときはこれだけである。荷物の軽量、小型化を考えるとこうならざるをえない。毎朝方になると寒さに眼がさめるので便利であり、そんな日に限って天気は良い。これで温かく眠むれたときは遅かれ早かれ雨がくる。米軍放出のカバーは温かいが重い。日本のリツロン製は軽いが若干寒いらしい。目のつんだ純毛の布でチャックをつけたのを作りたいと思っている。

c は き も の

地下足袋とわらじの併用が良い。前者は土方用の少し大き目のを買って中に薄手の靴下を一枚はけば靴ずれ（多くは親指と次の指の間）が防げるようであ

る。後者は買う前にひもを引っぱったりして目のつんだものでなければすぐに用をなさない。これは案外かさばるものであるから各自3足迄が限度であり、大体一日はくと痛んでしまうようである。上ノ脚下の核心部は延べ2日間ぐらゐだから核心部以外はわらじなして行動すべきである。なお使用する前夜からよく水につけて強度を増さねばならない。

d ゼルブストザイル

ゼルブストは個人装備である。各人の好みや研究によってウエストローブであったり、安全ベルトであるだろうが、これは是非もってゆかなければならない。そのザイルにはセルフビレイ用のロープ(100cm)を先端にはカナビナをかけてつけておく。これは渡渉の際にミドルに当るものはこのカラビナをメインローブにかけて渡渉するのである。

e ルックザツク

以上で述べてきた共同装備、個人装備を入れた上で最小限7~8日の食糧を携行しなければ平より源流までの溯行はできないであろうから、それらのものをとりまとめて入れるとなれば、その大きさが問題である。

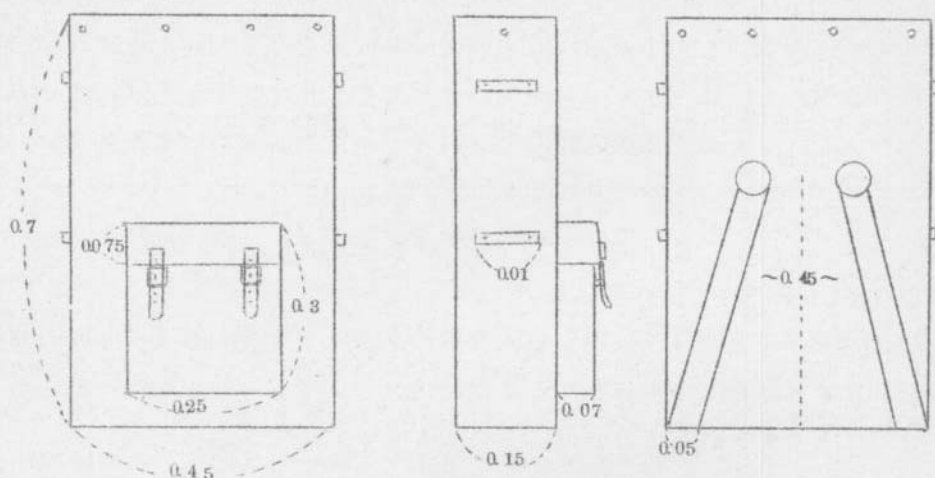
渡渉、トラバース、高捲き、懸垂下降と身軽に行動できることが沢登りの条件であれば、横長型のキスリングは不適當である。できるだけ体の巾からはみでず、さらに余り細長いと体のバランスが崩れやすいので注意を要する。結局どんなルックザツクが理想的であろうか。

吾々は黒部の溯行用に作らせたものを携行した。結果は上々であったが2~3改良すべき点があるのでそこを考慮して溯行用ザツクの一例を解説しておきたい。

生地は特大用の厚手のものより中厚の方が重量扱い易さの点で優る。寸法はその人の体格によって変ってくるが大体その人の肩巾より10cm程度狭いのが良いだろう。この型のザツクはその人の首の位置以上に荷を入れるとバランスがとれないから、長さをやたらに長くしても無駄である。その人の腰におさまり、よく首のところまで荷物を入れてもまだ長さに余りがなければフタの役目を果たせないことも注意を要する。次に厚みは余り厚いと後ろにひっぱられ易

くトラバース等に不利である。ポケットには2 l^t 入りのポリタンク、その他小物の入る程度にとどめる。負革はその支点が一ヶ所のものより二ヶ所の方がバランスがよいだろう。サイドの皮はわらじをむすびつけるとか釣竿、ピッケル（沢に関係ないが）を通すとか大変便利なものである。なお底にはマチを入れた方が荷が多く入るのでぜひつけるべきである。

ルックザック一例図



以上で溯行における主なる装備を述べてきたが、装備は個性的なものであり各人の工夫によって如何ようにも多様性をもつものである。

市販されているものは全て研究された上の製品であるとはいえ、そのみに満足しては装備を生かして使うという態度が育たないと思う。個性的な装備を身につけている人こそ黒部の魅力を知りうる人であろう。

下表は39年に使った食糧表である。この時の腹具合を思い出してみるに食いたらんという思いにつきまとわれていた。然し穂高合宿のあとであつたり誰も下山後もへばらなかつたのを見ると、穂高における食べ過ぎの習慣で胃拡張みであつたのかも知れない。但し風呂の量は1+2を一度に食べても足りない程少量であつた。クラツカは軽すぎていけないと思う。この程度の重量とかさばりを中心に各人工夫されるのがいいだろう。毎日のほんの少しづつのぜいたくが微妙にバランスや重量に負担をかけることにはよくよく注意されたい。

39年度 黒部川溯行 食糧献立表

朝		昼		夕	
I	II	A	B	I	II
ラーメン 1.5袋	インスタント スパゲティ 1.5袋	ビスケット (4×5cm) 5枚	クラツカー 1/2袋	(カレー) 米 1.3合	(みそ汁、野 菜いため)
タマネギ1/16ケ	タマネギ1/16ケ	チーズ少々	ジャム少々	ハム 本	米 1.3合
インゲン豆 1/4本	インゲン豆 1/4本	ジュース	ジュース	タマネギ1/8ケ	わかめ)
紅シヨウガ	紅シヨウガ	A + B = 1 日分		インゲン豆 1/2本	みそ)
お茶	お茶			キヤベツ1/2枚	キヤベツ葉 1/2葉
				マツシユポテト	タマネギ1/8ケ
				福神漬	マヨネーズ
				トロロコング	バター1/8ケ
					ふりかけ
					みりん干魚
					塩こんぶ

各分量は1人分である。この他にコーヒー・
紅茶・砂糖・塩・あめ・菓子を少々持参した

9 回 想 の 黒 部

「そ の 一」

○ 通いなれた峠も いつもながらに苦しかったが、ひとり峠を登ってきた少女が 山の名をたづね 手帖にスケッチをたのまれた 写真をとってもらったお礼に水晶岳の水晶をさし出すと ヤッホーと峠を下っていった

○ 二度のアタックを天候のため果たしえなかった上ノ脚下は遠く赤牛の下を流れている 三度目の正直という言葉がある 今度はぜひとも征服してやると意気揚々と峠を下る (永森洋一)

○ 黒部の水は美しい 蒼く透明な流れの底に 宝石を敷きつめたようだ

○ 左岸ゆきづまり 右岸へこすところ約30mの渡渉は 雨も手つだって胸までつかりながら やつとの思いでこす

○ みるみる水かさがまして、露出していた水中の岩がかくれ、水色は泥色となる 底をさらってゆく本流の色だ 濁流に響音をとどろかせて、たぎりおちてゆく

○ 眠りの枕に流音ますます激し 黒部よ怒りを解き給へ

○ 右岸へ胸までの深さで渡渉 全身しびれて まるで真冬に水の中にとびこんだようだ (永 森)

○ 口元のタル沢上手をタル沢側への渡渉は首までつかって必死の渡渉をする 全身がぬれてふるえがとまらぬ哀れな姿だ タル沢はまだ陽がささず 樹の間からもれてくる約一坪の陽だまりに 三人が暖を求める

○ 廊下沢は岩の積み重なりの上を水が落ちるやゝ大きな沢 あの開けたあたりが廊下乗越であろうか 空が蒼い

○ 左へ折れるあたり宙天高く間の山をへだてゝ偉大なエネルギーを思わせて薬師はそびえる

○ 数合沢出合まで兩岸共に明るく開けて爽快なところ 出合やゝ下流の砂地に幕営しようと今日最後の渡渉 急流を胸まで浸るのは最後といへどつらい業だ

○ 夕飼の仕度の済む頃 陽はようやく落ちて静かな溪の夜が訪れそめる あの暗い廊下とこの明るい河原 それら陰陽をまとめて 黒部の豪快な流れは尽きるところを知らない

○ 奥の廊下の突破こそ最後にして最大の課題 この水量ではトロの部分の乗越は可能か どうか だがこの雄大な大自然にきて寸時のことを思うまい 自然は永遠のもの 吾らの意志ある限り山はにげてゆきはしないのだ

○ 私は破れ去った、強烈な黒部の自然に立ち向うに私は弱すぎたのだ

○ 深々とした水を眼前にして さらに予想される廊下の中のトロと激流を思うとき 私は負けたと感じた 長い年月求めてきたものゝ私の力では打ち克てない威力が 僅か6mの水を越えさせなかった どのくらいの時間この大岩に立っていたことだろう 飛びこもうとする心と負けたいと思う心との相克がこの6mの距離にあった

○ 小野氏はその丸い岩の上に立ったまゝ上流を見つめている 果してゆけるだろうか 無理かも知れぬ あの太岩までは行けるだろう しかし……

(永 森)

○ 長い沈黙の後、小野氏が戻ってくる 返事はわかっていた (永 森)

○ 二人の若い友人は黙って私を見る 彼等は何も云わず 頑に腰を下ろす

○ 見上げる黒部は秋の色を表わしていた 深い谷に木の葉が散り、冷たい風が吹いていた それが心にさみしさを与え 黒部のきびしさを感じさせた

(永 森)

○ 行きづまったところで深いトロを7mばかり浅瀬目指して泳ぐ いくら手足を動かしても下流へ流される力の方が強い 気の遠くなりそうな冷たさの中を死にもものぐるいで泳ぐ

○ 滝もなく平凡な谷を進むと 水も消えかける頃 前方7mをへだて、かなり大きな熊とばったり出合う 一声うなりをたてたかと思うとブツシュの中に逃げこんでいった いつまでもザワザワとブツシュの動く音がする 彼は野苺を食っていたらしい そこには赤い苺が残されていた

○ 富山の火を眼下に見ながら 生涯忘れがたい日だったと思う 星にむかって誓う 私はへこたれはしない 挑戦するのだ 上ノ廊下へ

○ 栗師沢出合は森林におゝわれて暗いが 流れそのものはあの豪快さをなくして 穏やかに滑ってゆく やはり豪快な黒部にこそ 私の思いが燃えるのだと考える

○ 深い樹木に密雲が走り じつとりと葉末をぬらしてゆく 源流を測る

○ 源流一帯は木々が赤く染め始め秋らしくなっている (永 森)

○ ドウドウと流れは走る 谷と人とが一体となり 時のたつのを忘れて飛石を続ける 谷あるきを知るものゝ味わいであろう

○ 吾々は鷺羽乗越へと登る あの豪快そして長大な黒部も 今や一糸の水と化して 黒部の旅は終り 追憶は限りなく脳裏をよぎる 一沫の無念さは残るが それ故にこそ黒部は今も私のライフワークとして偉大な存在なのだ 黒部こそ 私の山である

○ 早や秋の気配が山にひっそりとしのび込み すれちがう山ゆく人もどこか淋しげだ

「そ の 二」

○ 去年の二倍量はある針ノ木峠への雪を辿る これで峠は九回目だ

○ 雪溪とお花畑とはいまつの中のザラ場にテントをはれば こゝはもう吾々だけの別天地だ

○ さあこの夢のようなキャンプの夜をじっとかみしめよう

○ いよいよ廊下沢に向って下る 数合の頭の向うに 薬師がカールをみせて黒部へすべりこみ その左には雲の平の上に 黒部五郎がそして赤牛が口元のタル沢の上部を雲にかくして ならび立っている さらに頭を左にめぐらせば 木挽山の美しいカーブがぐっと泊り これらの山々がモルゲンロートに色彩られている その下に黒部は まだ眠っているのであらうかその姿を見せない

○ 赤牛岳の濃密な森林が眼前に拡がっている 黒部に一步一步近づく この爽快さはたとえるべきものがない

○ 去年砂地で快適だったキャンプサイトは岩と石との河原になっている 自然の驚異というべきか

○ 去年泳いで必死だったところは すねぐらいで渡れる この水量を前にして なぜか哀しいのだ

○ 焚火をひろいあつめてファイヤをたく 同じみの顔の四人が 今夜もまたその親しみを深めてゆくだろう

○ 今日が昨年度の計画を中断しなければならなかった核心部の溯行だ 思えば悩み苦しんだのも65日であった その勝敗が今日一日で決するといっても言いすぎでない (古谷精宏)

○ わらじをはき 三ツ道具にセルフスト 赤い補助ザイルに白いナイロンザル これらに加えてカメラまで 順序正しく身にまといつけ いよいよ溯行がはじまる

○ 兩岸はまったくついたてを立てたようだ、そのむこうでは流れが落差を見せており 左岸よりには白い岩が見える 核心部のトロである

○ この間約50mだった 確保していると 皆んな悲愴ながんばりを見せてやってくる

○ さしもの上の黒ピンカもその怒りを解いて 川はぐっと明るくなってくる

○ ずぶ濡れの体はいよいよ極限に達して ふるえがとまらず 闘志がきえてしまいそうだ 仕方なくザックをおろして 冷たいジュースとチーズとクラッカーをほおばる 今日雲の多い日で 少し陽が差したかと思うとすぐかげってしまうので みんな空ばかりながめている ようやく体のぬくみを取り戻して立上ると すぐに渡渉ということになる

○ 金作沢の段丘が現れる むしように嬉しくなってくる みんな奇声を発

してにこにこと　今までの寒さなんか忘れたような顔をしている

○　あの壁　あの流れ　あの寒さ　そしていゝ仲間たち　ついに核心部を溯行しえたのだ

○　さあ友よ火をかこもう　この充ちたりた夜をさらに豪華な思い出としよう　それはそうとして　この煙むったさはたまらんわい

○　ザックはロープでつないで　水に浮べて引っばる　ブカリブカリとやってくる姿は　何とユーモラスなことか　つい軍艦マーチが口をついてでる

○　この岩小屋はとおく黒部のパイオニア時代から親しまれてきたものだ　吾々も同じ屋根の下に泊ることが　たのしくてならない

○　岩小屋について程なく雨がふってくる　吾々は岩小屋の奥へ奥へと押しこめられ　身うごきできぬ状態で仮眠す　（古　谷）

○　荷を下ろして互の健闘をたゝえ合う　これで下ノ廊下　上ノ廊下　そして源流まで　全て吾々の踏跡が　つゞられたわけだ

○　「ゴツツアンデ！」　この一言が吾々の溯行の代償と言えるたった一つの　尊い清らかな代償であった

○　上ノ廊下よ　僕はいつまでも君との闘いを忘れないだろう　僕は君のあらゆるとうせんぼを突破してきた　けれども振り返ってみる君の姿は　やはり今もって厳しいものにしか見えない

「そ の 三」 (和田徳之)

○ 私が黒部川に初めて立った気持ちをどの様に表現しているのか それはこれからやろうとしていることに対する 恐れであったかもしれない 憧れにた楽しさであったかも知れない

○ この様な複雑な気持ちも 上ノ廊下への第一歩をふみだすと たゞ前進するのみの意気込みで 良い渡渉点を探すことであり 冷たい流れの中で両足をしっかりと支え 対岸へ渡っていくことの連続である

○ 水だけとってみれば何の変哲もないものだが 遠く数キロにおよぶ廊下を通ってくる水は いくつもの表情をもっている

○ あるときはやさしい表情 こんな時は自分自身冷たさも苦にならず楽しみながら行けるのである

あるときはやさしい顔の中に恐ろしく近よりがたい表情 こんな顔に出会うと 岩をへつり又静かに足を浸すのである

あるときは全く恐ろしい表情 こんなときは全く足もとにも及ばない感じを与える こんな表情にも挑戦しなければならない ザイルをはって挑戦するのである

○ 岩をへつっていてその下を トロとなって流れる水 激しい水しぶきを上げながら落ちる水 浅瀬を滑ってゆく水 これらの水が心の中に様々な変化を生むのだ

○ こうして水と戦い 自分自身とも戦わねばならなかった この様にして上ノ廊下は終わった

「おわり」